

順正寺報第十六号

『彼岸会』御案内

当山「順正寺」では、壇信徒の総霊位をまつり、仏恩報謝の念いをこめて、左記の通り「春季彼岸会法要」を厳修致します。

公私共御多忙とは存じますが、万障繰合せの上御参詣下さいます様、お願い致します。

記

二月二十四日（木）

「結願の日」

午後一時より

法説経 法話 おとこき

以上

◎御自宅で読経を御希望の方はお電話下さい。

彼岸入り 三月 十八日（金）

お中日 三月 二十一日（月）春分の日

結願 三月二十四日（木）

◎寺へ御遺骨をお預けの方は、お彼岸の期間中に必ずお参り下さい。

尚、二十日（日）・二十一日（春分の日）にお参り頂ければ、読経供養致します。 住職

◆『彼岸』の意義について。

「彼岸」とは、日本固有の風習であります。この風習は、古来より伝わり、今日まで生き続けてきたものであり、本来は「至彼岸」のこと、つまり、「彼岸に至る」ことを言います。ここでいう「彼岸」とは、極楽浄土・彌陀世界のことであり、そこまで辿り着くことをいうわけです。ただし、そこまでは、難渡海（渡り難き海）があり、自力にて辿り着けるものではなく、その海を越え、全ての者を岸まで導くのが「彌陀の本願」なのです。例えば、「彌陀の本願」とは、「難渡海を渡る大船」といえるものです。ゆえに、彼岸とは亡き人の徳をしのびつつ、その誘いにより「彼岸」を慕い、彌陀の大船に乗じて救われていかんと発心する場であります。「彼岸」に至るまで、未法濁世に生きる我々には多くの苦しみがあります。その世の中で生をまっとうしていくことを願っているのが、仏様であり、阿彌陀様であります。そこに、真に気付いていく機会として、「彼岸」という一つの風習が今日まで根付いてきたのであります。

「夏休み、どこか行くんか？」

「おう、北海道、周遊券で野宿しながら一周しようと思ってる。洋さんは？」

洋さんとは私の一つ上の従兄、大学の先輩でもある。私は、1979当時、京都にある真宗大谷派の大学に通うため、洋さんの寺の近くに下宿していた。毎晩のように、フラフラと、京都の街を洋さんと遊び歩いていた……

「おう、あちこち行くで。とりあえずは児文研の巡回やな。」と、洋さん。

児文研とは、児童文化研究会という、人形劇、紙芝居、ゲーム等を得意技とする文化系のクラブで、関西のお寺や幼稚園などで活動をしている。そして、夏には、一週間とか、二週間であちこち巡回公演をしているのだ。

「えっ？巡回なんてやってるんだ？」

「おう、ええぞ。今年は北陸まわるんやけどな、O・Bや、先輩の寺、教務所に呼ばれていくからな、あごあし、宿付き。お礼まで貰えるさかいな。食いもんもええぞ。『お造り』ドーン、酒も肴も悔い切れん、飲み切れん。最高やぞ。」

「ゲ——ゲッ」

この時、大谷大学の一回生にして、すでに演劇研究会の会長だった私には、貧乏な劇研、そして、貧乏な会員の姿が脳裏を横切ったのだった。安易に、しかし、力強く、

「よし！俺らも地方公演やって、只で旅行しよう！銭もうけしよう！うっしゅあ、寺でうける芝居作るぜ」と、意気込んでみた、十八の夏。

が、しかし、世の中はそんなに甘くはなかった。結局、大学四年間の学生生活の中で、そんな地方公演はできなかった。それというのも、先ず、適当な脚本が無かった。とりあえず、倉田百三の『出家とその弟子』なんてのがあったが、当時の私にはちっとも面白くなかったのだ。まっ、今でも同じだけど。そんな訳で

「自分で造ったるかいな」と、

「とりあえず、『親鸞』。でも、親鸞は難しいよなあ。そりゃあちゃんとした人が書けばドラマになるだろうけど、私が書いたんじゃドラマにならない。『蓮如（れんにょ）』かあ：本願寺第八代『蓮如（れんにょ）』。妻が八人、子供が二十七人、これだけでも相当きてるもん。これならちよろいぜ。」と、十八の私は思ったもんです。

しかし、『ちよろいぜ』なんて思ったのがいけない。何時でも書けると思うとついつい書かないでいる。一年が過ぎ、二年が過ぎ……

あれですね、京都に四年間居て、殆ど観光地にいていない。何時でも行けると思っていると、行かないで終わってしまうわけ。それに、私は夏休みは忙しかった。高校時代の友達と、毎年、式根島にキャンプに行き、北海道へも行き、お盆もある。お盆と言えば、七月十六日は京都の祇園祭り。八月十五日は大文字焼きと、京都の夏を彩る風物詩が在りますが、私はどちらもお盆でお盆参りがあったため、見た事がないのだった。ちなみに、七月にお盆を迎える地方というのは全国的にも少なく、大学の前期試験なんてのも、ちょうどこの時期にあって、「なんとかしてくれ」と学生課に意見したが、一人二人のために学校のスケジュールは変えられないと、冷たくあしらわれたのだった。結果、私は、まるで芸能人のように、京都と東京を往復していたのだ。

話がどんどん横道に逸れる。エイッと元に戻す。で、とにかく、いい加減で、忙しくて、そして、劇団員は貧乏なくせに我が儘で、理屈っぽくて、何と、五人しかいなかったのだ。だから、世の中、

甘かろーが、辛かろーが、出来る訳もない。第一、「よし、やろう！」なんて思ったのはその時だけ。後はたまに思い出す程度。殆どそんな事は忘れていた。

そして、卒業後数年、

「おーい貫正、何かいい芝居ないか？」

と、私と同期で、卒業後も懲りずに芝居を続けているハザマが言ってきた。

「そーか、行き詰まったか。しょうがねえな。」

よし、俺が長年暖めてきた戯曲やらしてやろう。

しょーがねーな。まあ、同じ釜の飯を食った仲だ、タダで使わせてやるよ。」私は太っ腹だ。

そんなわけで、長年暖めていた戯曲を上演させてやることになったのであった。しかし、思い出していたきたい。私は学生時代戯曲を書いたか？ 答えは、「NO」。じゃ、卒業後は？

そんなもんちっとも書いていなかったのだ。

そして、長年暖めていた戯曲は、それから三日で書き上げ、殆ど暖める間もなく京都に送られていったのだ。

それが、あの読売新聞京都版にも取り上げられた、幻の名作『蓮如』であった。

その後、そんな事もすっかり忘れて、芝居とも

縁を切って、カタギの生活を送っていたが、

1993年、東京七組同朋大会、そのイベントで、
(トーキーーナナソと読む。くれぐれも「ナナク
ミ」と読まないください。いいとした大人の
集まりなもので：豊島・練馬・板橋・北区の大谷
派の寺の集まり。その中のイベント) 前年、力を
入れ過ぎて今年の企画が浮かばない。行き詰まっ
た実行委員が、「五年後に蓮如の五百回忌もある
し、とりあえず、蓮如でなにかやろうよ」と、安
易な発案をしてしまったのだ。そして、かつて、
「俺、蓮如の芝居書いたことあるぜ」なんて、ポ
ロツと何処かで言ってしまったことを、しっかり
覚えている奴がいたために、ついに、『蓮如』の
上演となってしまったのであった。私にとって八
年ぶりの芝居。弟も四年ぶりの芝居である。第一、
脚本だ。確かに数年前に書いたけど、あれはスタ
ッフも揃っていることを前提に書いたわけだし、
客層も学生主体。今回は、役者は初めて、スタッ
フはいない、客層は社会人、時間は四十分。これ
だけ違えば書き直しは必至。全く違った芝居を作
り直さなければならぬ。困った。本当に困った。
それでも、実行委員必至の踏ん張りで、つたな
いながら何とか出来上げたのだった。

ところが！安易な人間はどこにもいるもんで、
真宗大谷派東京教区報恩講のプレ・イベントで、
又、企画に行き詰まったらしい。そして、『あの
芝居をやってくれ』って。『やってくれ』って言
われて『NO』とは言えないこの性格。又、やっ
てしまった。

「だからだと、何をつまらないことを」とお思
いでしょう？何のこれしき、まだ続く。

さて、『蓮如』であります、前にも書いた通
り、『親鸞』は難しい。それで『蓮如』なんです
けど、この『蓮如』、調べていくうちに、どーも
嫌な奴。なにしろ、聖と邪、酸いも甘いも、とい
うか、良く言えば大物なのでしょうが、某元総理
大臣や、某宗教団体の代表を思い浮かべてしま
うような男。

「こんな奴の芝居ってやだよなー。大体芝居な
んてもんは、観る人は主役に感情移入していくの
に、こいつには感情移入したくないよなあ。」
何て書く人間が思っているんだから、そのまま
は、ろくな芝居ができっこないわけで、それで悩
んだ事も、今となっては良い思い出。

それでも懲りずに『蓮如』の事を考えている。
ふと、頭をよぎるのは、

『自己とは他なし。絶対無限の妙用（みょうゆう）に乗託して（おおいなるはたらきに生かさる）任運に法爾に（因縁のままに、あるがままに）この現前の境遇に落在せるもの、即ちこれなり。』という、清沢満之という先学の言葉。

『現前の境遇に落在せるもの』

「蓮如って、もしかしたらこれだったんか？ つい、偉い人だとばかり思っていたからあれだったと、あれは、それ、その時その時、そうせざるをえなかったとしたら：」

途端に、それまでさん然と成金のように輝いていた蓮如はいなくなり、そこには、余りの多くの挫折に、背中を丸めた蓮如がいた。

そして、あの、「崩し過ぎてると思う」「今まで思ってた蓮如上人と全然違っていたので面食らった」などなど、狙い通りのご批判をうけた。

優柔不断な蓮如の誕生である。

『蓮如（れんにょ）：落在せるもの』

これが昨年八月に公演した時の題名であった。

そして、今年一月の公演では、

『蓮如：ナスがママなら、キュウリはパパヨ』

と、題名を改めて上演したもののさ。何故、改めたか？それは、つまり、その時、その時、宣伝用の

チラシを作成するに当って、思い付きで付けてしまった為に、毎回違った題名になってしまふのだ。まっ、とりあえず、蓮如の芝居なので、『蓮如』と大きく書いておけば良いわけで、後は、野となれ山となれ。

ところで、この『落在』を自覚したり、『なすがまま』でいることは、とても難しいし、また、つらい事だと思っています。やっぱり、「自分の意思で生きて、活動している」と思いたいし、また、人に迷惑を掛けたくないし、世話にもなりたくないという気持ちがあるわけです。

ところが、自分の意思も、力も全く及ばない事が多々あるわけです。

人と多く接すれば接するほど、それは増えていくわけです。

そして、『生死』。

これが一番大きな、どうにもならないもので、

『朝に紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり』

『おおよそ、はかなきものはこの世の始・中・終、まぼろしのごとくなる一期なり』

と、蓮如も書いております。

五人の妻と死に別れ、また、多くの人々の臨終を見た蓮如の言葉です。

自分の力を、ありったけ尽くしても、手に負えない。この悲しみゆえに、始めて蓮如は本願を信ずる事ができたのだと思います。本願とは、『全ての衆生を救う』という、阿弥陀仏の誓願です。会者定離、愛者別離（会った人、愛する者とは必ず離れ、別れる事と定まっている）は、我々、娑婆世界に生きる者には、どう仕様もない事実で、これから逃れる事はできません。しかし、『浄土』は、俱会一処（俱「とも」に一つとことろにて、相会う事ができる）と言われ、別れた人とも会える世界、もう、離れないで良い世界である。これは、蓮如にとって、無くてはならない世界であったわけです。亡き父や母、妻や子ともう一度逢うことの出きる世界、ここに生れる道を蓮如は歩み続けたのです。この道を『成仏道』といいます。そして仏道を歩む事は、自分の力ではないのです。僕らがこの世に生を受けること、これは、『縁』によります。父や母、祖父や祖母、その又祖父母と、人間が誕生してからずっと続いてきている『歴史の必然』として『生』を受けたわけですから。そして、『浄土』に生まれる事も、同じく『必然』として決定しているのです。ですから、この世界に生まれたということは、成仏道を歩む

ということになるのです。その事に気付くのです。亡き人を縁として、今まで足を運んだことのない坊さんと話をした。そして、成仏道を歩んでいく。この、

『仏道を歩んで行く』という事は、与えられた命を、境遇をまっとうして行くことであると思います。どんなにつらく、悲しいことがあっても、そこに生きている事が望まれているのであり、そして、その道は、一人ではなく、すでに、共に歩む人々がいる。

浄土に生まれるというのは、何処か別の世界へ行ってしまうことではなくて、今、ここに、共に同じ道を歩もうとする『諸仏』がいて、そして、僕らはその「一緒に歩こう」という声を聞くという事なのです。『諸仏』とは、即ち、すべての『衆生』です。

人間の意志、夢は絶望します。しかし、それは人間自身の絶望ではないのであると思う。先に書いたように、『自力の執着心』の絶望であって：それでも生きている、そして、『生きていることを望まれている』ことに気付いてください。そこから『仏道』というものに気付いていくわけです。

そこからは、威風堂々と生きて行けるはずですが、なにしろ、何が有ろうとも『仏道を歩み続ける事』は、我々の必然からの使命なのですから。

こうして『蓮如』は、周りから見ると、

「優柔不断だ。二枚舌だ。」と、とられても、その命を生き通したのではないかと、了解するに至った訳です。

さて、そんなわけで、また今年も十月に「東京七組同朋大会」が開かれます。何をやるか未だ決まっていませんが、スタッフを募集しています。

もし、イベント等、興味のある方は、私、もしくは弟に声を掛けてください。

宜しくお願い致します。

合掌

蓮 如 系 譜

宗祖 第三代（本願寺を興隆）

親 鸞

鸞 如 覺 如

如円（正妻）

応玄（弟）

存如（第七代）

蓮 如

蓮如の実母（お妾）（第八代）

『蓮如』略年表

西曆	年齢	事項
一四一五	一	二月二五日、東山大谷に生れる
一四二〇	六	父、存如が正妻を迎えるため、実母と訣別
一四三三	一九	異母弟・応玄が生れる。
一四四九	三五	東国布教の旅に出る。親鸞の足跡を追う。
一四五七	四三	六月、父、存如没。応玄との継承争いの末
一四六一	四七	本願寺第八代・留守職（門主）となる。
一四六五	五一	最初の『お文』（宗徒への教えの捕らえ方を手紙として記した物。消息）を發する。
一四六七	五三	比叡山僧兵、本願寺を破壊。近江に逃れる
一四六八	五四	近江堅田にて報恩講を行う。応任の乱。
一四七一	五七	二回目の東国布教。
一四七三	五九	越前吉崎に拠点を構える。（吉崎御坊）
一四七四	六〇	寺内町が形成され、そこに集う門徒を多屋
一四七五	六一	といった。それにより、多屋衆といわれる
		集団ができた。
		富樫家のお家騒動に巻き込まれて行く。兄
		政親と弟・幸千代の争い。多屋衆、政親と
		共に決起。『お文』が最も多く書かれた。
		三月、吉崎炎上。多屋衆・政親、勝利。
		本願寺門徒、富樫政親と争い破れる。
		八月、蓮如、海路脱出。吉崎↓河内の出口
		京都山科に本坊をきめる。
一四七八	六四	山科本願寺建設着工。
一四七九	六五	八月、山科本願寺完成。
一四八三	六九	一向一揆、富樫政親を敗死に追い込む。
一四八八	七四	蓮如、隠居する。
一四八九	七五	大阪、石山本願寺建立にかかる。
一四九六	八二	三月二五日、山科本願寺にて没す。
一四九九	八五	

『白色白光の会』ができて丸三年が過ぎました。この三年間に新会員の方も増え、又、壇信徒も新たに増えました。そこで、この会に興味がある人にもない人にも、会の主旨をお伝えするため、ここに記します。

びやくしきびやくこう

『白色白光』とは？

「佛説阿彌陀經」より、
池中蓮華 ちゆうちゆうなんげ 大如車輪 だいじゆしゆりん 青色青光 しやうじゆしきしやうこう

黄色黄光 わうじゆわうこう 赤色赤光 しやくしきしやくこう 白色白光 びやくしきびやくこう

（池の中の蓮華、その大きさは車輪のごとし。青い華は青い光、黄色い華は黄色い光、赤い華は赤い光、白い華は白い光をはなつ。）

蓮華を我々に例える。それは車輪のように大きい。つまり、個々の存在とは、車輪のように大きな華という事です。それほど大いなる意義を持つものがある、という事でしょう。そして、その華（我々）は種々様々な色を個々に持ち、同じものは無いのです。又、そこから放たれる光も、種々様々。白い華は白い光を放つように。

我々は、他人の色、その人の放つ光の色や輝きは解ったとしても、自分の色・光には、気付いているように全く気付いていません。

今、我々に必要なのは、自分の色と、回りに放っている光に『気付こうとしていく』その姿勢なのです。そのため、より多くの人達と接していくことは大変意義のあることです。「人は鏡なり」と申します。人と接し、佛と接していく中で、そこに写し出されていく自己を見詰めていく事ができるような場、『そういう自分』に気付けるような場であるように、そして、本当に色々な色があるのだと気付く、その色を（人の放つ色も、自分の放つ色も）否定すること無く、見詰められるようになっていければという想いを込めて、『白色白光の会』と、させて頂いたできました。

△口 堂手

『白色白光の会』御案内

四月の『白色白光の会』は、左記の通り執り行ないます。

記

◎日時・四月八日（金）午後一時

◎△云処・順正寺本堂

会では常時会員を募集しています。皆で語り合い、学び会っていく楽しい会です。
詳しいことは当寺までお問合わせ下さい。

〒177 東京都練馬区石神井町3の17の4
03 (3996) 2064

順正寺